

あゆみ通信

VOL. 117

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

三宝に帰依し、共にあゆむ



2017年合同研修会

2015年から、第2組の次代を担う青年僧「朋友会」との合同研修会を始めて早くも3年が過ぎた。当初はぎくしゃくしていたこともあったが、最近、住職になられたお寺も増えて、まさに世代の交代を予感するこの頃。

それだけに、お寺を聞法の道場にするためには、どうしたら良いか。高齢化や核家族化が進み、門徒の数の減少もいよいよ危惧される中でのお寺はどうあるべきかが、まさしく大きな課題になってくる。こうした折に、推進員(門徒)と住職が、腹を割って共に宗祖親鸞聖人の御生涯と教えを共に学ぶことがいかに大事であるかを痛感する次第である。

第2組をどう活性はさせるか、お寺の興隆をどう図るかなど、本音で話し合える機運は一步一步であるが歩み出している。

朋友会との合同研修会

日時 2018年9月27日(木)

午後1時30分～4時

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

講題「お念仏を
いただくとは」

講師

池田英二郎先生

(宗恩寺)

参加費 無料



所長巡回

2018年8月23日(木) 午後6時から、了安寺(海老海恵幸組長)で、大阪教区から宮浦所長、森次長等4名と別院職員1名を迎えて第2組所長巡回が開催。折から台風20号の接近と言う状況のために、住職・坊守20名と門徒会から5名が参加しました。これは7月の教区会、教区門徒会で承認された内容を踏まえ、宗派経常費依頼と宗派の現況、教区運営方針の伝達、説明の年間行事である。説明奉告時間を短縮し、午後7時の終了となった。

第2組これからの行事

●第2組聞法会

「共に学ぶ『正信偈』」

日時 2018年9月12日(水)

午後2時から

会場 紹隆寺(天王寺区堀越町)

内容 お勤めと法話

講師 新田 修巳先生

(平野区

正業寺)

参加費 500円

本年、先生最後の
法話となります。

●第2組聞法会

日時 2018年10月20日(土)

午後2時から

会場 光圓寺(天王寺区茶臼山町)

内容 お勤めと

法話

講師 三好泰紹

先生

(22組 蓮正寺)

参加費 500円

先生は、第4期第2組推進員養成講座の講師としてお世話になりました。第2組聞法会の最終になります。



痛 焼 (つうしょう)

先日、即應寺の法話で住職からお聞きした言葉である。

辛いとか悲しいとか、そういうことを言っている余裕が無い、心を焼かれるような痛みと言う意味である。

今年、自身が経験した娘の病氣再発から入院、そして闘病生活の中でどんどん痩せ衰えて死へ向かう娘を見ながら、変わってやることの出来ないいらだちと、不安。そして、娘を通して死を自覚した時が甦る。まさに、それである。

歴史を振り返ると広島、長崎の原爆投下と沖縄全土が焼失した第二次世界大戦による壮絶な経験。また先月書いた終戦1か月前の、母が亡くなった3歳の弟を火葬にするために、ねんねこで背負って滋賀から電車で帰って来た時の母の壮絶な心。それを救ってくださるのは、仏法僧の三宝に帰依し、先輩達が引き継がれてきたお念仏をいただき、人生を生き抜くこと。(本)

第2組聞法会報告

2018年8月25日(土) 午後2時から、天王寺区の光照寺(墨林浩住職)で、第2組聞法会が開催され、組内の住職、寺族と門徒、推進員37名が参加した。

海老海組長の進行で、真宗宗歌を斉唱し、墨林住職の調声でお勤め。引き続き稲垣直来



先生(17組徳因寺)により法話をいただいた。

先生は、真宗宗歌の2番の「とわの闇より救われし」について、解説しながら「みなさんはどんな気持ちで南無阿弥陀仏を称えていますか」と問いかけ、老病死について、ご母堂の突然死で右往左往したことや、闘病中の前住職の生き死について、また、ご門徒さんとの「老い」にまつわる話を淡々と語られながら「そんな生活の中で、手を合わす意味とは何かについて話された。そして門徒さんと、親鸞聖人の御生涯を「正信偈」で、「本願名号正定業～必至滅度願成就」



を学んでいると話された。
稲垣先生の法話を聞いて
浪花 博
(法山寺)

まずはじめに、真宗宗歌の2番より「とわの闇とは」「救われし身の幸」「六字のみなをとなえつつ」という歌詞と親鸞聖人の歩みを学ぶ「正信偈」の「本願名号正定業、成等覚証大涅槃」について、大



切な教えを懇切にお話頂きました。

先生は、お母さんの突然死での混乱、お父さんの看病を通じてご苦労、また、難病の青年の闘病生活の悩み、母親の病気が原因でいじめにあった少年の思いなど、生老病死について身近なお話をされました。

「生」は豊かでありたい。「老」は若さを保ちたい。「病」は健康でいたい。「死」は長生きをしたいというのは、そうであれば幸せと言う自分の思い。「状況」であり、比べる世界です。



「本願」「南無阿弥陀仏(無量寿)」と言う名号は、真実の言葉で、人が生きて往く方向を正しく定める「存在」であり、いろいろあったけれど全部私の人生であるという世界であります。「闇」の音は本音。自分がしたいことが分からない。「闇より救われし」は本当にしたいことが分かったとことです。「死にたい」と言うのは、どうしたら生きられるか分からないことであり、本願を名乗ることによって、死にたいは生きたいにな



るのです。

最後に「仏法に出遭わずに、人生を終えてはいけない」とい



酒井義一先生

う酒井義一先生(東京教区存明寺住職)の資料が紹介されました。大谷大学児童教化研究会に次の言葉が伝承されている。

いつまでも純真なれ

→純真なる願いに立ち返り続けよ

いつまでも未熟なれ

→未熟さの自覚こそが歩みの原動力となる(仏法に出遭っての)

いつまでも持続せよ

→歩みに終わりが無いことだけが、自分の歩みの始まりの証拠



最後の締めくくりとして、(六字のみ名を)

「となえつつ」が大切だと申されました。終わり。

(今回も、浪花博会長に聞法のまとめをしていただきました。(本))

本願名号正定業 至心信樂願為因 成等覚証大涅槃 必至滅度願成就

正信偈